

ゼミ論
霧社事件から見る異文化
問題（仮題）

4年B組

学籍番号 00g0122

三友真希子

第一章 はじめに～霧社事件の今日的意義

第一節 冷戦の終結と文明の衝突

冷戦が終結し、世界は新しい時代を迎えた。

冷戦下では世界は大きく三つに分けられた。アメリカ合衆国を中心とした資本主義国、ソビエト連邦を中心とした共産主義（社会主義）国、そしてこのどちらにも属さない発展途上国の第三世界である。そして世界政治はアメリカ、ソ連を中心に二極化したわけである。体制の政治原理の正当性をめぐって激しい論争が繰り返された。この時代、世界を分ける最も重要な問題はイデオロギーであったのである。

そして1989年秋、共産主義国が崩壊し1991年ソ連が解体し冷戦は終結した。共産主義国の崩壊によって冷戦は終結し、資本主義、民主主義によって世界は一元化されると考えられていた。しかし実際にはどうであろうか、パレスチナ問題、コソボ紛争など世界の様々な地域で紛争、戦争がおきている。それはなぜか。その問いに答えたのがサミュエル・ハンチントン氏の「文明の衝突」論である。

現在の様々な民族の対立の原因はイデオロギーの対立ではなく文化の違いによる対立になってきたというのである。冷戦時代、世界は大きな枠組みで捉えられていたが、それが終わった今、人々は人間の根本であるアイデンティティを追求しそれが文明間の衝突になるというわけである。自己のアイデンティティを主張し、それを他者に認めさせようとするとき対立が起きる。冷戦後の今、文明のアイデンティティが統合・分裂あるいは衝突のパターンを形作っていると言っている。

では、文明間の衝突がおこっている今の世界で私たち日本人はどれほどそれを実感できているのであろうか。

第二節 多民族国家「大日本帝国」と民族紛争としての霧社事件

こうした文化衝突を考える上で日本の状況は他の国々とは少々違ってきている。例えば中国においては、その広大な国土の中には56の民族が存在して国を作っている。そこには宗教、歴史などを異にしている民族があり、チベット問題、新疆問題など様々な問題を抱えており常に民族紛争と隣合わせの状況である。しかし日本は島国であり、アイヌ、琉球、在日問題などはあるが、基本的には同じ文化を共有している民族の集まりなのである。こうした中、文化の違いによって衝突が起きることが我々にとってはあまり現実味のない、無関係のこのように感じられてしまうが、果たして日本は異文化間の衝突を経験した事がないのであろうか。

植民地主義の波の中、日本もかつては台湾と朝鮮、南洋諸島を版図に治める多民族国家であった。そこにはもちろん文化の違いがあり、様々な衝突があったわけである。その一つが台湾で起きた霧社事件である。この事件はとかく民族紛争とは無縁と考えがちな我々に

その問題を自民族の体験に引き付けて考え直す、貴重な歴史的体験でもある。今日の時代であるからこそ日本が体験したこの霧社事件を取り上げることに意義があると考えたのである。

第二章 霧社事件とは

第一節 霧社事件の経緯

日本は日清戦争の講和条約である下関条約により1895年台湾を領有し、以後50年間台湾を植民地支配した。当初台湾人は激しく抵抗していたが、日本の弾圧、政策により次第にその抵抗は終息し、台湾支配は安定していった。そうした中、1930年10月27日に霧社事件は起こった。

台湾、台中州能高郡蕃地霧社分室管内における高山部落11部落の内、6部落を中心とする青年男子約300人が27日早朝一斉に蜂起し、日本人134名、台湾人2名、合計136名を殺害した最大の抗日蜂起である。

霧社では年中行事として毎年秋に、地元の台湾人が通う霧社公学校において日本人子弟が通う小学校との合同運動会が開かれていた。事件当日、学校には運動会のため日本人が多数集まっていた。そこで事件は起こったのである。

蜂起は首領モーナルダオを中心に、当日の未明からいくつかの部隊に分かれて、駐在所を次々に襲撃し、誰にも気づかれず最大襲撃地である霧社公学校の運動会会場にたどり着いたのである。

そうして午前八時過ぎ頃、国旗掲揚を合図に、原住民が運動会会場を襲撃し、日本人をほぼ全員を皆殺しにした。この時台湾人は殺されておらず（殺された二人は日本服を着ており、流弾にあたって誤殺された）日本人のみを狙った計画的犯行であったといえる。

抗日最大の蜂起が霧社で起こったということは、日本に大きな衝撃を与えた。

霧社は本島の中央に位置し、海拔1148メートルの山地にして、中部の山地に出入りする道路の要地であり、事件当時日本人57人、台湾人111人の小部落を成していた。そこには警察課分室、郵便局、小学校、公学校、雑貨屋、旅館、診療所、養蚕指導所があり、各種作物の指導奨励、牧畜、養蚕など成果をあげている、原住民の集落の中では最も「開化」が進み、教育水準が高いとされている地であった。

また、それ以上に日本当局を驚かせたのは蜂起の一員に花岡一郎、二郎がいたことであった。彼らの本名はダックス・ノーピンとダックス・ナウイといい、霧社の部落の原住民であったが、警察に目をかけられ日本人児童の小学校に入学するなど、エリート教育を受け事件当時は警察官を務めていた。日本は学費、結婚費用等を供与し、兄弟でもない彼らに日本名を付け、「理蕃」の模範生として育ててきたのである。

では、何故もっとも「開化」が進み、花岡一郎、二郎のような人物がいた霧社で台湾統

治時代の最大の抗日蜂起事件がおこったのであろうか。

第二節 霧社事件の原因

では、事件が起こった原因はなんだったのであろうか。いくつか挙げてみたいと思う。

1、過酷な労役

霧社分室管内では事件が発生するまでの3年間にわたって、建物の建築、修繕、道路の補修など様々な工事に原住民に義務労働として出役させていた。本来原住民は自由を尊び、束縛されるのを嫌っていたが、原住民の狩猟時期、農耕時期を顧みることなく労役を強制した。また木材運搬の労役の際、原住民は引き摺って木材を運ぶ習慣があったのだが、日本当局は木が傷むのをさけるため、この伝統的な方法を許さず肩に担いで運ばせた。このことは彼らにとって大変な苦痛であった。

2、日本人警察官の暴行

日本人警察官は度々原住民に 事件の直前の10月7日午前10時頃、日本人警察官である吉村巡査がマヘボ社の頭目モーナルダオの家の前を通りかかった所、同社の人間の婚礼が行われており、約40名ほどが宴会を開いていた。モーナルダオの長男であるタダオモーナは吉村巡査を見て熱心に酒を勧め、巡査はそれを断っていたがタダオモーナはさらに強引に勧めた。巡査はタダオモーナの手が酒宴のためにさばいた豚の血にまみれているのを見て、たまらず彼の手を持っていたステッキで殴打した。これに怒りタダオモーナは巡査に掴み掛かり地面にねじ伏せるなどした。彼が熱心に酒を勧めたのは、タイヤル族の風習で酒を勧めることはその人への尊敬の念を示す事だったのである。

もう一つ同じような事件がある。ホーゴ社頭目が狩猟の帰りに駐在所の前を通りかかった所、巡査が彼に中に入って酒を飲むように熱心に勧めた。頭目は誘いを断れず、仕留めたイノシシを差し出し酒を飲み、だいぶ時間が経ち日没までには帰りたいことを巡査に何度も告げたが、彼は更に執拗に酒を勧め、頭目は日本語が分からなかったため「バカ」と礼を述べた。彼らの言葉で「バカ」とはお酒を十分に頂いてもう飲めないという意味なのである。しかし巡査はバカにされたと思い、暴力を振るい、頭目は体中に傷を負い一週間後に内出血で死亡してしまったのである。

3、生活様式の

霧社の原住民族のタイヤル人は、代々、狩猟と粟、陸稲の栽培をおこない生活していた。しかし日本当局は彼らを高地から川に近い平地に移住させ、今までの焼畑農耕から水稻農耕に転換させたのである。水稻の定地耕作は、水利を開き、田畑を耕し、苗を植えなど様々な作業がありとても忙しく、大量の人手が要り、また常に警察に監視されているため、とてもつらいものであった。そうして伝統的な農耕儀式や狩猟の組織も次第に解体していき、

市場交易の意識が形成され、タイヤルの固有の文化が段々と変化していった。

このような事がもとで事件はおこっていった。もちろん今挙げたこと以外にも様々の事が積み重なっているが、その根本原因、共通しているキーワードは「文化」の違いによる衝突である。

ここで民族というものについて見てみる。民族の定義を『世界大百科事典』ではこう書いてある。「民族とは次のような性格をそなえた集団である。第1に、伝統的な生活様式を共有する集団である。つまり語族や語群が言語の系統分類にもとづき、人種が身体形質を基準とした分類であるのに対して民族は文化にもとづいて他と区別される集団なのである。第2は、人種や語族が、形質や言語系統という客観的な基準にのみよっているのに対し、民族は、伝統的文化の共有という客観的基準のほかに、われわれ意識 という主観的基準が加わっていることが特徴になっている。第3は、民族とはけっして固定したものでなく、歴史的に生成され、変化をとげていくものである」

つまり民族も「文化」というものが重要になってくるのである。もちろん日本と霧社の原住民族とでは民族が違う。よって文化も違う。しかし統治する立場で日本にとって、台湾での統治は非統治者を無条件に権威に服従させる一種の権威統治であったため、彼らの文化を顧みることをせず、文化の衝突がおこったわけである。日本の文化を模範とさせ、彼らの独自の経済活動、祖霊信仰、祖先崇拜、首狩り、刺青などを破壊していったのである。

つまり霧社事件は自分達の文化が侵され、否定された事に対する反乱であり、そして自分達の文化を守るための戦争だったのである。

第三節 これまでの霧社事件

では今まで霧社事件はどのように扱われてきたのであるか。戦後、事件に関する研究らしい研究の本、論文などがあまりでていなかったのが実際のところである。このことは戴國輝氏が『霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意義 - 台湾少数民族が問いけるもの - 』のなかでこう指摘している。「霧社蜂起に関する社会科学的研究のモノグラフとみなしうる論文が皆無である事。また霧社事件の執筆者の多くは研究を業としない人々で、いわば在野研究者である。台湾研究の日本における現状がいかにいびつであり、研究を業としている中国史・日本研究者が負うべき責任をほとんど負っていない厳しい現実である。」

つまり霧社事件は今までなんらかの偏りを持ち伝えられてきたといえる。それは戴國輝氏がここで指摘している事ともう一つ、事件を起こした当事者達の意見がないからである。事件の当事者たちは事件後、霧社から川中島（現在の清流）というところに移住させられ、日本の厳しい監視下の中苦しい生活を送っていた。そのためあまり事件について語るといふ人がいなかったが近年になってその状況が少しずつ変わってきた。

第三章 事件の当事者側の証言に基づく新たな研究

当事者達が事件に関して語るようになり、その証言に基づく本などが多くかけられるようになったのである。当事者の気持ち、考えを知る事は事件を理解する上で最も重要で、確かなことである。それにより今までで分からなかった事実、彼らの思いなどが見えてきた。今までにない、当事者一人一人に話を聞くことによって霧社事件を追っている二人の方の本を紹介したい。

林えいだい著『台湾秘話 霧社の反乱・民衆側の証言』である。林えいだい氏はノンフィクション作家であり、『証言 高砂義勇兵』『台湾の大和魂』など多数の真実に基づく作品を書いている方である。この作品の中では10数名以上の様々な方から話を聞き事件の細部、当時の様子、気持ちなどを書いている。それによって事件の凄まじさなどが今まで以上にリアルに伝わってくる。また今までの研究では見えてこなかった点などが浮かびあがってきている。従来の資料では、初めから日本人全員を殺す計画だったとされているが、実際に証言を聞いてみると婦女子は殺さない約束であったということである。このように当事者に話を聞く事によって書かれた資料だけでは分からなかった新たな事実がでてきたのである。

柳本通彦著『台湾・霧社に生きる』である。柳本通彦氏は台湾に在住するフリーのジャーナリストで、様々な角度から台湾を取材し、ドキュメンタリー作品なども制作している。幅広いフィールドワークで様々な事実や人物にスポットをあてて、史実を詳細に描写している。この本は原住民の生の声が聞け知らずと現在の彼らの気持ちが伝わってくる。

このような証言本は私たちに新しい発見を教え、彼らの本当の気持ちを教えてくれる手がかりになるものであり、とても貴重である。近年になってなぜ彼らはこのような証言を始めたのであろうか。それは彼らが彼ら自身の歴史を取り戻そうとしているからではないだろうか。前にも少し述べたように民族にはわれわれ意識、つまりアイデンティティというものがある。日本統治時代それを否定され、その後の国民党政府によっても押さえつけられてきたものが今、だんだんと表れてきているのではないだろうか。次の章で私自身が実際に霧社に取材に行った事について述べるが、その時にもその事は感じる事ができた。霧社の役場では事件に関する資料などを作り、町の新聞にも事件のことを大きく取り上げており、私たちにも積極的に話をしてくれた。

彼らは今まさに自分達の手で自分達の民族を見直しているのである。

第四章 霧社を訪ねて

第一節 霧社事件の現在

2003年12月8日、私は実際の事件がおこった霧社に向かった。霧社は台北から5

時間バスに乗って埔里に行き、さらにそこからバスで1時間、山道を登ったところにある。途中の山道は春になると梅の花が咲きとても綺麗だという。霧社は道沿いにほんの数件の商店と警察、消防署などがあるくらいでうっかりしていたら見過ごしてしまうような小さい村である。

私が霧社を訪れようと思った理由は、現場、人々を自分の目で見て、聞いて、事件をより自分に近づけて感じてみたかったからである。もちろん前章で紹介したような本を読む事によっていろいろ感じられるのではあるが、本や資料などの間接的なものと自分で直接的に見るのもまた違うであろうと思った。そしてその考えは間違っていなかった。私はより多くのものを得る事ができた。

私はまず、霧社抗日記念碑がある場所へいった。そこは道路に面したところにあり、白い立派な門構えには「碧血英風」と書かれていた。その門の中に入ると「霧社山砲抗日起義記念碑」と書かれた記念碑が建てられており、その後ろに事件の首領であるモーナルダオの墓がある。記念碑は国民党政権によって1953年に建てられ、墓は1973年に建てられた。ここにはモーナルダオの骨はもちろん霧社事件で犠牲になった人たちの骨が埋葬されている。そしてここでは毎年10月27日に慰霊祭が開かれている。国民党政権がつくったというのだから当然だが、ここでいう犠牲者とは原住民に殺された日本人ではない。事件後、日本人によって殺害されたり、自ら命を絶ったりした原住民の人である。そこはまるで村の中心をなしているかのような感じで堂々あったのが印象的であった。

そしてこれと相反している場所が日本人慰霊塔である。つまり霧社事件で原住民によって殺された日本人の墓である。村の入り口あたりを少し登ったところにある。いや、あったといったほうが正しい。柳本氏の『台湾・霧社に生きる』(1996年)には台座と階段部分が残っていると書かれていたが、私が行った時にはここに本当に慰霊塔があったのかという感じであった。もちろんそれらしき残骸は何もなく、新しい家が建てられている途中であった。私は、本当にここが慰霊塔のあった場所なのか心配になり、近くにいたお年寄りに尋ねてみた。するとそのお年寄りは日本語を話せ、丁寧に教えてくれた。「ここには昔日本人慰霊塔があったが、階段部分も二ヶ月ほど前に全て壊して新しい家を建てている」と。村の中心に堂々と建っている抗日記念碑とは正反対である我々日本人の祖先の墓、私は複雑な気持ちになり、これが事件に対する霧社の想いなのか、と感じた。

そして旅の一番の目的は当事者に話を聞くということである。まず私は「仁愛郷公所」つまり霧社の役場を訪ねてみた。霧社事件について調べていて、話を聞きたいと言うと、突然訪ねていったにもかかわらずとても親切に対応してくれた。そしてそこで知り合った広報を担当している方が、とても親身になってくれ知り合いを紹介してくれ、事件の当事者の子孫が暮らしている清流へも連れて行ってもらった。ところがすでに事件を体験した方はほとんど亡くなっていた。来るのが少し遅すぎたと残念な気持ちでいっぱいだった。しかし事件を実際に体験した人ではないが、親から聞いた事件の話、その後の日本統治の話、日本に対する想いなどを幾人かのひとに話を聞くことができた。

その中で印象的だったのが、「日本は確かにひどいことをしたが、日本の事は恨んでいない。教育をしてくれた事にはとても感謝している。もし自分達がずっと教育も受けずにきたら今以上にもっと弱い立場になっていた。」と話してくれたことである。それがどこまで本当の気持ちか、私が日本人であるから遠慮してくれているのかはわからないが、少しほっとしたような、私たちには彼らに対する責任があるような感じがした。また彼らが流暢な日本語で話してくれるので今まで本の中でしか分からなかった歴史が実際、本当にここにあったのだと改めて実感した。

私が出会った原住民方々は本当にみな親切にしてくれ、歓迎してくれた。日本の若い娘が来た、といって喜んでくれ食事会などを開いてくれた。そしてこのように言った「昔のことは昔のこと。恨みももっていないし、今の世代の人たちには関係の無い事。しかし今の霧社を少しでもいいから助けてほしい。日本人達は事件の事を調べには来るけれどただそれだけだ。今の霧社をどうにかしてほしい」と。確かに私は事件のことばかりで今の霧社というものを見ていなかったのかもしれない。そこには今、生きている人がいるのである。私のようなただの学生が霧社どうにかできるとはおもってはいないが、私たちのような世代の人が少しでも台湾と日本、霧社に関心をもってくれるようにできればと思う。

今回実際現地に行き直接原住民の方と触れ合ったことによって、事件をより身近に感じることができ、さらに今の霧社というものが分かりとても素晴らしいものであった。

第五章 まとめ

こうして見てきたように、霧社事件は現代の我々にとって大いに教訓になるものである。混沌とする世の中で我々日本人は自分とは無関係のような顔で世界の争いを見てきたが、テロの恐怖などが間近に迫ってきている今、それは他人事では済まされなくなってきた。今の世の中で何故このような事態がおきているのか、我々には理解しにくい所もあるかもしれない。しかし日本もかつては異文化と衝突してきたという歴史があるのである。霧社事件はまさに日本自信が体験した異文化間の戦争であり、私たちに問い掛けてくるものが多く、様々なことを教えてくれる。こんな今だからこそ、日本が、我々一人一人が霧社事件を顧みることが必要なのではないだろうか。そして世界の出来事を理解していく必要があるのではないだろうか。

参考文献

- 『現代史資料 2 2 台湾 2』 山辺健太郎編 みすず書房
- 『台湾霧社蜂起事件 研究と資料』 戴國輝編 社会思想社
- 『抗日霧社事件の歴史 日本人の大量虐殺はなぜ、おこったのか』 鄧相揚著 機関紙出版
- 『台湾の霧社事件 - 真相と背景 - 』 森田俊介著 伸共社
- 『社会学提要 - 台湾・霧社事件、2 . 2 8 暴動』 千原英之進著 学文社刊
- 『台湾 四百年の歴史と展望』 伊藤潔著 中公新書
- 『台湾統治秘史 霧社事件に至る抗日の全貌』 喜安幸夫著 原書房
- 『台湾・霧社に生きる』 柳本通彦著 現代書館
- 『台湾秘話 霧社の反乱・民衆側の証言』 林えいだい著 新評論
- 『文明の衝突と 2 1 世紀の日本』 サミュエル・ハンチントン著 集英社新書
- 『文明の衝突』 サミュエル・ハンチントン著 集英社
- 『世界大百科事典』